

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

( 4 年計画の 4 年目)

## 1. 研究課題

転換期中国における社会経済制度

Social and Economic Institutions in China during the Period of Transition

## 2. 研究代表者氏名

村上衛

Ei MURAKAMI

## 3. 研究期間

2016 年 04 月 - 2020 年 03 月 (4 年度目)

## 4. 研究目的

本研究班は中国において社会・経済を規定してきた慣習・常識・規範・秩序・行動様式といった固有の「制度」が転換期(1980 年代以降、清末民国期、明末清初期)において、どのように維持され、あるいは変容してきたのかを検討する。近 20 年の中国の高度成長の中で中国経済の世界経済に占める割合は高くなり、経済水準は大幅に上昇した。しかし、中国経済の拡大と人的交流の増大にともない、中国固有の「制度」が顕在化する場面も増えてきており、それらを理解できない外国人との間で様々なレベルの摩擦が生じている。この問題解決のためには、中国固有の「制度」を理解することが重要になっている。また英語圏におけるグローバル・ヒストリー研究は比較史研究を活性化させたが、19 世紀以降における西欧と中国の「大分岐」あるいは日本と中国の「小分岐」についての説明は十分にできていない。それは、これらの「分岐」の背景にあるそれぞれの地域の社会経済「制度」の違いを理解していないからである。かかる歴史的な課題の解決のためにも「制度」の研究の必要性はますます高まっている。本研究班では転換期において様々な衝撃のなかから顕在化してくる社会経済「制度」を多角的に検討し、その研究成果を広く発信していくことを目指す。

In this study, we examine the continuance and transformation of Chinese institutions such as customs, common sense, rules, orders, and behavioral patterns, which have regulated its society and economy, focusing on the period of transition, i.e. from late Ming to early Qing, from late Qing to early Republican, or after the 1980's. The economic development in China during the last 20 years has attracted many foreigners seeking business opportunities. As the contact between foreigners

and Chinese people increased both in and out of China, various conflicts arose because of cultural and behavioral differences between the native Chinese and foreigners. Thus, it became important for us to understand the social and economic institutions in China. On the other hand, recent studies about global history have contributed to the advancement of the comparative historical studies, mainly in the English-speaking world. However, these studies do not fully explain the “great divergence” between Western Europe and China, or the “small divergence” between China and Japan since the nineteenth century. This is because they do not properly understand the regional difference of social and economic institutions, which have evolved a variety of “divergence”. In order to solve the historical questions above, we aim to investigate the social and economic institutions from various angles.

#### 5. 本年度の研究実施状況

本年度は研究班の最終年度にあたり、合計 17 回の研究会の実施を予定している。毎回の参加者数は平均で 25 名ほどで、本学文学研究科、人間・環境学研究科の院生をはじめとする若手の班員からも積極的な参加と発言を得た。本研究班は時代的・テーマ的に広い範囲を扱うため、中国近現代史研究者のみならず、明清史研究者や現代中国研究者、また人文科学系だけではなく、社会科学系の経済史研究者に参加していただいている。コメンテーターは関西に限定せず、首都圏や静岡・長崎などの各地から報告テーマに即した研究者を招聘した。いずれの報告に関しても活発に討論が行われ、報告・討論の時間を合わせて 3 時間半近くになることもあった。なお、本研究班では定例の研究会に加えて班員の金順姫氏の講演会「習近平『一強体制』の足元 いま中国で何が起きているのか」を 2 月 22 日に予定している。なお、研究成果は来年度中に報告論文集として刊行の予定である。

#### 6. 研究成果の概要

最終報告書に記載

#### 7. 本年度の研究実施内容

2019-04-26 世界の海上ハイウェイ近代に貨物はどこにどれだけ運ばれたのかー 発表者 木越義則 名古屋大学

コメンテーター 大島久幸 高千穂商科大学

2019-05-17 広州入城問題の起源ーマカートニー使節団からペインズ事件までー 発表者 村尾進 天理大学

コメンテーター 井上裕正 奈良女子大学

2019-05-31 清代北京の民間消防組織 発表者 堀地明 北九州市立大学

コメンテーター 高嶋航 京都大学

- 2019-06-14 清代後期重慶の社会的安定化と流動化—巴県档案の団練関連記事より 発表者 小野達哉 同志社大学・非常勤  
コメンテーター 鈴木秀光 京都大学
- 2019-06-28 近代中国における肺結核療養院の実態:牯嶺普仁医院を中心として 発表者 瞿艷丹 京都大学  
コメンテーター 福士由紀 首都大学東京
- 2019-07-12 同治末年の政策決定における皇帝・軍機大臣の関係と皇太后 発表者 大坪慶之 三重大学  
コメンテーター 岩井茂樹 京都大学
- 2019-07-26 清末教育改革における「中体西用」思想について—「貴陽師範学堂日本教習毆辱学生事件」を中心に 発表者 関芸蕾 京都大学  
コメンテーター 藤谷浩悦 駒澤大学・非常勤
- 政治化する読書空間:1930年代中国における大衆動員とリテラシーのメディア史的研究 発表者 比護遥 京都大学  
コメンテーター 中村元哉 東京大学
- 2019-09-27 社会史からみた二林蔗農事件——日本統治期台湾農民運動の再検討 発表者 都留俊太郎 京都大学  
コメンテーター 大門正克 早稲田大学
- 2019-10-11 橋樑と1920年代日中の社会変革論——満洲国への射程 発表者 谷雪妮 京都大学  
コメンテーター 江田憲治 京都大学
- 2019-10-25 中国経済と「所有権」:土地・会社制度からの視点 発表者 梶谷懐 神戸大学  
コメンテーター 岡本隆司 京都府立大学
- 2019-11-08 南京国民政府の「強迫」期における社会教育——上海市を例に 発表者 角屋敷直哉 京都大学  
コメンテーター 戸部健 静岡大学
- 2019-11-22 登記の時代(2)——1930年代、南京土地登記を阻むもの 発表者 田口宏二郎 大阪大学  
コメンテーター 吉澤誠一郎 東京大学
- 2019-12-16 近代朝鮮における中国向け海産物の生産と流通——テングサを中心に 発表者 石川亮太 立命館大学  
コメンテーター 谷ヶ城秀吉 専修大学
- 2020-01-10 China's Mundane Revolution: Cheap Print, Common Readers, and Vernacular Knowledge in the Long Republic 発表者 Joan Judge York University  
コメンテーター 高嶋航 文学研究科
- 2020-01-24 胡適と1927年「上海・四・一二反共クーデタ」——グリーダー『胡適』の書評と

して 発表者 浜田直也 神戸女子大

コメンテーター 金丸裕一 立命館大学

2020-02-07 牧志朝忠の活動とその意義:一九世紀東アジアの一通事 発表者 張子康  
文学研究科

コメンテーター 木村直樹 長崎大学

## 8. 共同研究会に関連した公表実績

なし

## 9. 研究班員

所内

村上衛、石川禎浩、岩井茂樹、籠谷直人、古松崇志、漆麟(日本学術振興会外国人特別研究員)、王剛(招へい外国人学者)、趙曄(研究生)、陳瑤(招へい外国人学者)

学内

貴志俊彦(地域研究統合情報センター)、小島泰雄(人間・環境学研究科)、高嶋航(文学研究科)、江田憲治(人間・環境学研究科)、秋田朝美(経済学研究科)、郭まいか(文学研究科)、谷雪妮(文学研究科)、都留俊太郎(文学研究科)、李ハンキョル(文学研究科)、駒込武(教育学研究科)、奈良岡聰智(法学研究科)、彭鵬(人間・環境学研究科)、王天馳(文学研究科)、上島享(文学研究科)、北村由美(附属図書館)、太田出(人間・環境学研究科)、瞿艷丹(文学研究科)、潘藝心(人間・環境学研究科)、鈴木秀光(法学研究科)、呉舒平(法学研究科)、Steven Ivings(経済学研究科)、巫靚(人間・環境学研究科)、王怡然(人間・環境学研究科)、塩出浩之(文学研究科)、張子康(文学研究科)、小堀慎悟(文学研究科)、楊峻懿(人間・環境学研究科)、久保田裕次(大学文書館)、小林篤史(東南アジア地域研究研究所)

学外

山崎岳(奈良大学)、石川亮太(立命館大学)、上田貴子(近畿大学)、易星星(兵庫県立大学)、大坪慶之(三重大学)、岡本隆司(京都府立大学)、荻恵里子(京都府立大学)、小野寺史郎(埼玉大学)、片山剛(大阪大学)、加藤雄三(専修大学)、金丸裕一(立命館大学)、蒲豊彦(京都橘大学)、菊池一隆(愛知学院大学)、木越義則(名古屋大学)、楠原俊代(同志社大学)、小林亮介(九州大学)、兒玉州平(山口大学)、柴田陽一(愛知県立大学)、坂井田夕起子(愛知大学)、城地孝(同志社大学)、城山智子(東京大学)、園田節子(兵庫県立大学)、瀧田豪(京都産業大学)、田口宏二郎(大阪大学)、田中剛(帝京大学)、団陽子(神戸大学)、陳来幸(兵庫県立大学)、富澤芳亜(島根大学)、豊岡康史(信州大学)、西山喬貴(University College London)、根無新太郎(京都府立大学)、狭間直樹(京都大学)、浜田直也(神戸女子大学)、細見和弘(立命館大学)、堀地明(北九州市立大学)、松村 光庸、丸田孝志(広島大学)、三田剛史(明治大学)、宮内肇(立命館大学)、村尾進(天理大学)、望月直人(大阪経済法科大学)、森時彦(京都大学)、森川裕貫(関西学院大学)、吉田建一郎

(大阪経済大学)、吉田豊子(復旦大学)、劉雯(兵庫県立大学)、凌鵬(北京大学)、鷺尾浩幸(北海道大学)、彭浩(大阪市立大学)、篠原由華(同志社大学)、木村可奈子(名古屋大学)、岩本真利絵(大谷大学)、奥村哲(首都大学東京)、梶谷懐(神戸大学)、箱田恵子(京都女子大学)、濱島敦俊(大阪大学)、平井健介(甲南大学)、山本一(立命館大学)、彭劍(華中師範大学)、安東強(中山大学)、森万佑子(京都府立大)、村田雄二郎(同志社大学)、土居智典(長崎外国語大学)、金順姫(朝日新聞)、小野達哉(同志社大学)、土井歩(同志社大学)、孟二壮(大阪大学)

#### 10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	11 (4)	6 (4)	2 (1)	1 (1)	105 (38)	64 (38)	30 (15)	30 (15)
学内	5	28 (4)	18 (4)	19 (3)	19 (3)	159 (37)	80 (26)	113 (26)	113 (26)
国立大学	9	13 (3)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	32 (7)	3 (3)	0 (0)	3 (3)
公立大学	3	4 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学	10	22 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	87 (26)	0 (0)	0 (0)	9 (9)
大学共同利用機関法人	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関	2	2 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	2 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)
その他	1	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	31	81 (18)	27 (10)	21 (4)	21 (5)	395 (109)	149 (68)	143 (41)	155 (53)

※( )内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	58(51)
国際学術誌に掲載された論文数	3(3)

※( )内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
Cahiers d'Extrême-Asie	1	Militarization of Dargyé Monastery: Contested Borders on the Sino-Tibetan Frontier during the Early Twentieth Century	Ryosuke Kobayashi
Revue d'Etudes Tibétaines	1	Zhang Yintang's Military Reforms in 1906-1907 and their aftermath-The Introduction of Militarism in Tibet	Ryosuke Kobayashi
Canadian Journal of History/Annales canadiennes d'histoire	1	Achieving Economic Success and Social Mobility: The Chinese Community in Trinidad, British Caribbean before 1949	Setsuko Sonoda

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合

理由	人文科学分野においてはインパクトファクターそのものの定義が困難であり、また中国史研究は中国語・日本語で発表されるものの方が英語論文よりも学術的な重要性が高いことが多いため、学術誌として高い評価を得られているものを挙げた。
----	--

掲載雑誌	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名
社会経済史学	1	近代中国における一次産品輸出産業の形成と発展	木越義則
歴史学研究	1	戦後日本の中国近現代史研究におけるナショナリズム論	小野寺史郎

※拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

13. 次年度の研究実施計画

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果については来年度に論文の原稿をとりまとめ、再来年度に刊行することを予定している。

